近畿大学語学研修（中国語圏・台湾大学）に関する報告

飯塚　君穂・中野　徹

はじめに

近畿大学における中国語圏への短期語学研修は、現在、台湾大学と北京大学で行なわれている。台湾大学へは平成19年度、北京大学へは平成21年度から語学研修が開始した。以来、順調に回数を重ねてきたが、平成24年度は、尖閣諸島をめぐる報道の影響を受けて参加希望者数が激減したことに加え、PM2.5などの大気汚染を理由とするキャンセルが続出したこともあり、北京大学への語学研修は中止された。国際交流室をはじめ、近畿大学の関係部署の理解と協力により、語学研修開始から延べ193名の近大生が中国語圏への短期語学研修に参加し、これをきっかけに世界へと羽ばたいている[1]。

一方、本学における第二外国語教育は縮小の一途をたどっている。かつて教養部があった時代には、第二外国語科目は週2コマ開講されており、卒業要件として8単位が必修であった。しかし、本学が時代の流れを読み、英語教育重視に舵を切ったことにより、第二外国語科目は必修科目から選択科目となった。現在、東大阪キャンパスでは、1年次には週1コマが履修可能であり、第二外国語開講科目は10科目10単位である[2]。グローバル化が叫ばれる昨今、本学における第二外国語のカリキュラムはきわめて貧弱な状態にあると言わざるをえない[3]。

本稿では、平成25年6月に行なわれた経営学部FD集会での報告[4]をもとに、語学研修を開始するまでの準備期間2年と本学における台湾語学研修8年、計10年間について総括を行なう。また、あわせて本学における語学研修の今後の課題についても私見を述べたい。

台湾語学研修開始の経緯

まず、近畿大学における中国語圏の語学研修開始までの経緯を整理しておく。2002年、飯塚が旧語学教育部に移籍した時、本学における中国語履修者数は、第二外国語履修者のおよそ半数（約5000名）に達していた。第二外国語全般に言えることだが、中国語はこれほど多くの受講者を抱えていたにもかかわらず、すべての学部のカリキュラムに上級者向けの科目が設定されていなかった。また、当時、他大学では一般的に行なわれていた中国語圏への短期留学も存在しなかった。

この時期の数年間、本学の中国語教育に従事して感じた問題点は、中国語を学ぶ意欲の

ある学生が多数いるにもかかわらず、学ぶべきカリキュラムが存在していないことであった。

語学の授業で学んだことを実践する場、そして海外で異文化に触れる学びの場を学生に提供できないかと考え、台湾への中国語短期語学研修の素案を作成し楠本隆先生（当時は近畿大学語学教育部部長）に相談したところ、語学研修の案は進めるべきだとの強い支援をいただいた。

語学研修を始めるにあたり、飯塚がまず台湾の台北およびその近郊にある7つの大学についてリサーチを行なった。2005年から2年間の準備期間のなかで訪問調査を幾度か行ない、受け入れ先の候補を絞った。

各大学との交渉の過程で、交渉先から提示されたプログラムは、学習期間が2週間のものもあれば3週間のものもあったが、いずれも語学研修としての学習時間は十分に確保されており、それぞれ充実したものであった。しかし、実際に現地へ赴き視察をすると、どの大学のプログラムにも一長一短があり、飯塚個人が考える理想の語学研修とは合致しない部分がいくつか見受けられた。

選定の上でもっとも重視したのは学習環境であった。台北および台北近郊にある大学のうち、多数の留学生を受け入れている大学は、外国人向けの中国語教育経験が豊富な教員を抱えているものの、本部が置かれているキャンパスとは別に、台北市内中心部に語学センターが設けられていた。このため、語学研修参加者が現地の学生と交流する機会はほとんど見込めなかった。しかも、これらの大学は日本からの留学生も多いため、語学センター内の雰囲気は日本にいるのとほとんど変わらず、また、これらの大学が近畿大学のために独自のプログラムを提供してくれることは望むべくもなかった。この一方、キャンパス内に語学センターを設けて留学生を受け入れている大学の多くは台北郊外にあり、台北市内からの移動にかなりの時間を要した。語学研修はただ学生を現地に派遣すればよいというものではなく、学生にとってよりよい学習環境を整えることが重要であることは言うまでもない。

交渉のなかで、国立台湾大学文学院語学センター中国語部門（語文中心中国語組）の当時の主任であった趙飛鵬先生と教務担当の盧翠英先生に近畿大学向けの語学研修プログラムを開くことができないかを打診したところ、幸いなことに、他大学の学生と合同クラスではなく、近畿大学向けの特別プログラムを提案いただいた。少人数クラスでの学習時間数が確保されており、文化講座の内容や校外見学も充実していた。そのうえ台湾大学の在学生と1対1のパートナーシップ制度を採用するという、まさに理想的なものであった。

さっそく台湾大学が提案した中国語短期語学研修プログラムを同僚に説明したが、意外にもはじめは好意的に受け止められなかった。大学は旅行会社ではない、短期留学のよう

なものは旅行会社に任せればよい、大学には語学研修など必要ない、という声が多かった。思わぬ反対にあい、中国語履修者のことを思って企画した身としては残念であり悔しい思いをした。大学教員の業務が増加の一途をたどるなかで、これは無理からぬ反応だったのかもしれない。しかし、幸いなことに当時同僚であった大東和重先生（現、関西学院大学教授）の協力を得たこともあり、語学研修は実現に向けて動きだすことになった。台湾大学との幾度にもわたる折衝を経て、近畿大学生向けのプログラムを練り上げた。そして、学習支援の一環として、旧語学教育部主催により、2007 年度春休みに第 1 回台湾中国語短期語学研修が実現することになり、大学院・学部から 13 名の参加者が参加し、3 週間の研修が始まった。

以上が本学における語学研修開始の経緯である。

語学研修の概要

次に、台湾大学における語学研修の概要を説明する。

・実施状況

本語学研修は 2007 年度から 2014 年度まで計 8 回実施され、参加者は延べ 135 名にのぼる。主催は、平成 19・20 年度は近畿大学語学教育部であり、平成 21 年度からは近畿大学国際交流室となった。受け入れ先はいずれの年度も国立台湾大学である。各年度の実施状況は表 1 に記したとおりである。

	研修参加者 （女性の参加者数）	参加費用[5]	研修期間	引率教員
平成 19 年度	13 名（9 名）	約 21 万円	2008 年 2 月 18 日～ 3 月 7 日 （2 月 17 日出国、3 月 8 日帰国）	飯塚君穂
平成 20 年度	17 名（10 名）	約 22 万円	2009 年 2 月 16 日～ 3 月 6 日 （2 月 15 日出国、3 月 8 日帰国）	大東和重
平成 21 年度	20 名（10 名）	約 22 万円	2010 年 2 月 22 日～ 3 月 12 日 （2 月 21 日出国、3 月 14 日帰国）	飯塚君穂
平成 22 年度	20 名（14 名）	約 20 万円	2011 年 2 月 14 日～ 3 月 4 日 （2 月 13 日出国、3 月 6 日帰国）	大東和重・ 飯塚君穂
平成 23 年度	26 名（13 名）	約 16 万円	2012 年 2 月 13 日～ 3 月 2 日 （2 月 12 日出国、3 月 4 日帰国）	飯塚君穂・ 好並晶
平成 24 年度	16 名（9 名）	約 19 万円	2013 年 2 月 24 日～ 3 月 17 日 （2 月 24 日出国、3 月 17 日帰国）	飯塚君穂
平成 25 年度	14 名（10 名）	約 23 万円	2014 年 2 月 17 日～ 3 月 7 日 （2 月 16 日出国、3 月 9 日帰国）	中野徹
平成 26 年度	9 名（4 名）	約 25 万円	2015 年 2 月 23 日～ 3 月 13 日 （2 月 22 日出国、3 月 15 日帰国）	好並晶

表 1　語学研修実施状況

最少催行人数は 10 名、先着順で参加者を決定することが多い。応募資格者は、近畿大学で中国語を学修したことのある在学生である。今後、参加者が増え、定員を越えることが増えた場合に備えて、先着以外の選抜方法を考えておく必要がある。

本研修の目的は、参加者が自らの語学力を高めるだけでなく、異文化に触れることで他者への理解を深め、多様な価値観を身につけることにある。さらに、帰国後もより充実した大学生活ができるように、研修期間中は団体行動によって協調性を高め、生きる力を養うことも目的としている。

研修期間は、台湾の旧正月による休日の関係で開始時期は毎年異なるが、おおよそ 2 月中旬から 3 月中旬にかけての 3 週間である。

・プログラム

3 週間の滞在期間のうち、台湾大学における語学研修プログラムを表 2 に示した。近畿大学の一部の学部で海外留学プログラムが単位認定されたことにより、平成 24 年度からは学習時間数を統一することになった。

参加者数によって年度ごとに違いはあるものの、おおむね 3 クラス体制である。初級レベルは 2 クラス、中級レベルは 1 クラスで、1 クラスにつき台湾大学の教員 1 名が担当する。参加者が多かった平成 23 年度の 1 クラスを除き、すべて受講者数が一桁台の少人数クラスである。



写真 1　授業風景（2014 年）



写真 2　文化講座　扇子舞（2014 年）



写真 3　校外学習
九份（2014 年）

文化講座は、山水画、武術など、台湾文化に関することがらをさまざまな体験を通じて学ぶものである。校外学習では台北近郊の都市に赴き、まちを歩くことで台湾の歴史と文化を学ぶ。これらの研修プログラムは、台湾大学から文化講座と校外学習の候補を提示され、前年度の参加者の感想を踏まえ、事前交渉のなかでプログラムを決定している。

実施年度	文化講座研修内容	校外学習内容	学習時間	担当教員
平成 19 年度 （2008 年） （　）内は 実施年	・涅麺人 ・餃子作り ・中国結び ・茶芸	・故宮博物院 + 士林官邸 ・大龍峒 + 孔廟 ・金瓜石 + 九份 + 菁桐 （日帰り）	中国語講座45時間 文化講座 9 時間 校外学習 13 時間 （日帰り旅行 8 時間）	蔡雅雯 陳冠良 江伊恵
平成 20 年度 （2009 年）	・書法 ・茶芸 ・布袋戯人形作り	・三峡鷺歌 ・烏来 ・新竹南園内湾 （日帰り）	中国語講座45時間 文化講座8時間 校外学習16時間 （日帰り旅行8時間）	蔡雅雯 陳冠良 管韻
平成 21 年度 （2010 年）	・京劇 ・太極拳	・保安宮 ・深坑菁桐 ・高雄（一泊二日）	中国語講座45時間 文化講座6時間 校外学習24時間 （宿泊旅行16時間）	郭思吟 李家豪 林吟聯 管韻
平成 22 年度 （2011 年）	・太極拳 ・花卉博覧会	・九份 ・宜蘭伝芸中心 ・日月潭（一泊二日）	中国語講座45時間 文化講座6時間 校外学習24時間 （宿泊旅行16時間）	郭思吟 蔡雅雯 李家豪
平成 23 年度 （2012 年）	・歌仔戯	・菁桐（天燈作り） ・宜蘭（牛舌餅作り）	中国語講座 45 時間 文化講座 3 時間 校外学習 8 時間	李家豪 蔡雅雯 陳玟妤
平成 24 年度 （2013 年）	・山水画 ・水餃子作り ・詠春拳	・金瓜石博物館（砂金取り） ・郭元益糕餅博物館 （鳳梨酥作り）	中国語講座 45 時間 文化講座 9 時間 校外学習 5 時間	李家豪 蔡雅雯 許淑婷
平成 25 年度 （2014 年）	・剪紙 ・扇子舞	・九份 ・郭元益糕餅博物館 （鳳梨酥作り）	中国語講座45時間 文化講座9時間 校外学習5時間	李家豪 涂鈺婷 張筠聆
平成 26 年度 （2015 年）	・篆刻 ・布袋戯人形作り	・野柳 ・宜蘭三星葱農場 （葱油餅作り）	中国語講座45時間 文化講座9時間 校外学習5時間	李家豪 林怡秀

表 2　語学研修プログラム

・チューター制度

本語学研修プログラム最大の特徴は、台湾大学の学生ボランティアによるチューター制度である。台湾大学文学院語学センターのボランティア募集に応募した台湾大学の在学生が、“近畿大学遊學團”（近畿大学語学研修）の研修参加者の“學伴”（パートナー）となる。参加者一人に対して一名のパートナーがつき、平成 26 年度までに延べ 135 名の台湾大学学生が参加者のパートナーとなっている。パートナーは、参加者のことばの学習支援のほか、買い物や食事など、放課後の時間を使って参加者と交流する。

語学研修の期間中、参加者は、午前は台湾大学で中国語を学び、午後はパートナーとともに過ごすことにより、教室で学んだ中国語を実践する場を得ることになる。参加者とパートナーはおもに中国語で話し、ときには日本語と中国語を互いに教えあいながらコミュニケーションをとる。

参加者がパートナーとうまく意志疎通をはかれないこともある。しかし、実践を通して自分のことばがいかに通じないかを実感することも外国語学習では重要である。中国語は声調言語であるため、正しい発音とアクセントを習得していなければ、文献を読むほどの語学力があったとしても簡単な意思疎通を図ることすら難しい。自分のことばが通じないことは、参加者にとってショックなことだが、一方でことばの壁に直面することは、参加者が学習に対するモチベーションを上げる最大の起爆剤ともいえる。このように、参加者は中国語話者と実際に触れ合うことで語学力向上の必要性を痛感し、自覚的に学習に取り組むことになる。

なかには、英語を用いて積極的に意思疎通を図ろうとする参加者も見られる。このような行動は語学研修プログラムの主旨とやや異なるが、海外で生活することにより、第一外国語である英語の重要性に気づき、帰国後には英語も積極的に学ぶ学生も少なくない。また、台湾人学生との交流を通じて、自らの日本についての知識がいかに不足しているかを痛感し、日本文化や日本語についての知識欲を高める学生もいる。



写真４　パートナーとの集合写真（2010 年）

一方で、個人同士の相性やパートナーのスケジュールの関係で人間関係をうまく構築できない例も散見される。また、参加者のなかにはパートナーに頼りすぎ、何かしてもらって当然と思ってしまう者もいる。人

間関係をめぐる若干の問題は起こるものの、どの年度もグループで交流を図るなど、参加者とパートナーはおおむね良好な関係を築いている。このようなチューター制度を通じて、参加者は同年代の学生から大いに刺激や啓発を受ける。自分の世界だけではなく、友人のことを知るために、友人の暮らす国やことばのことをより知りたくなる。チューター制度は、参加者が台湾大学の学生と交流することにより、他者――異文化への理解を深めることにも貢献している。喜ばしいことに、帰国後も多くの参加者がSNSなどを通して、パートナーとの交流を続けている。

社会性を涵養するために

上記のプログラムを円滑に実施するために、準備する側はさまざまな方策を講じている。これらはいずれも参加者が主体的に研修に取り組み、研修を通じて社会性を涵養するためのものである。

・リーダー制

語学研修では、参加者からリーダー1名とサブリーダーを1～2名選び、語学研修プログラムに関する情報の伝達、日常生活についての情報交換、参加者の体調面でのケアを行なわせている[6]。これらは、学生に主体的に語学研修に取り組んでもらうための措置であり、後述する研修プログラムの多くは、リーダーとサブリーダーの指揮のもと取り組んでいる。リーダーがリーダーシップを発揮し全体をまとめる年もあれば、実力を発揮できない年もあるが、いずれの年も学生が中心となり研修プログラムを進めている。

・宿舎

台湾では、留学生向けの宿舎を設けている大学が少ない[7]。台湾における留学生の宿泊事情もあり、本研修では台湾大学のキャンパス外にある宿泊施設に宿泊している[8]。

参加人数にもよるが、宿泊先では3人部屋を基本としている。また、参加者がより多くの人とコミュニケーションを取り社会性や協調性を養うため、1週間ごとに部屋替えを行っている。

短期滞在とはいえ、参加者同士が同じ部屋で長い時間をともにすることは、メリットとデメリットがある。集団生活は、学生1人1人に安心感をもたらすが、家族以外の人間と長時間行動をともにすることになるため、生活習慣の違いからいさかいを起こすことも少なくない。過去、2人部屋にしていた年度もあるが、人間関係のトラブルが多く発生したため、ここ数年は3人部屋にしている。3人だと一つの社会ができるためか、2人部屋のときよりもトラブル発生の割合が低くなった[9]。また、3人部屋にすることで研修費用を低

く抑えることもできた。

語学研修は観光ではなく、あくまで大学教育の一環として行なわれている。このため、学習や健康管理、そしてリスク管理の面から、翌日に授業がある日は門限を午後 9 時に設定している。

・アルバム作り

参加者は二週目から、台湾大学語学研修のプログラムの一環として、研修の記念にアルバム作りを行っている。台湾大学での授業や校外学習、放課後のパートナーとの交流などで撮った写真を現像してコラージュし、中国語の文章をそえてアルバムを作る。

アルバム作りというイベントによって、普段の生活とは違うタスクが生じることになる。買い物や写真の現像という、現地の生活ならではの中国語の実践が語学力向上の一助となっていることはもちろんだが、学生たちはリーダーやサブリーダーを中心にそれぞれアイディアを出しあい、得意分野を活かせるよう役割分担をして、夜遅くまでアルバム作りを行なう。これは、集団行動における協調性を育む場ともなっている。

アルバム作りは子どものやることではないか、と毎年度学生からその企画の意味を疑問視されることがある。しかし、共同作業によるアルバム作りは研修終了後、参加者にとって記憶に残るイベントになっている。アルバムは参加者にとっての記念であると同時に、お世話になった人々へ感謝の意を伝えるものでもある。なお、アルバムは台湾大学文学院語学センターにも保管されている。

・成果発表会

語学研修の最終週には、3 週間におよぶ語学研修の成果発表会を行なっている。この成果発表は朝 8 時半から 12 時半までの 4 時間、中国語だけで行なわれる。中国語を使う教師陣とのゲームをはじめ、各クラスによる中国語の歌や劇の披露、そして、学生 1 人 1 人が中国語のスピーチを行なう。さらに、クラスごとに歌や踊り、演劇が披露される。これらは学生が自主的に企画を練り、放課後の時間を利用して準備をする。

最後に、台湾大学文学院語学センター主任から修了証書とアルバムを受け取り、台湾大学での語学研修のプログラムは修了となる。

・帰国報告会

台北に滞在している期間だけがこの語学研修ではない。帰国後、参加者には国際交流室へのレポート提出が義務付けられている。また、平成 23 年度からは語学研修の帰国報告会を行なっている。これは学生自身による語学研修の総括である。公開の場で成果報告を

行なうことで、参加者は自身が参加した語学研修について客観的に振り返ることができる。学生は発表原稿のほか、自身で作成したPowerPointのスライドを用いて研修内容について紹介し、また自身の反省点を報告している。この成果報告会を見学に来た学生が次年度の語学研修に参加するというサイクルもできつつある。



写真５　帰国報告会スライド（2013年）

引率者の役割

引率者は、参加者を全員無事に帰国させることを第一目標とし、語学研修期間中、参加者がよりよい語学研修を行なえるよう配慮している。

引率者の主な業務は、学生の出席状況の確認や体調面のケア、学習・生活両面における相談[10]、校外学習・文化学習などの通訳をはじめとする語学研修プログラムの実施のほか、台湾大学文学院語学センターのスタッフとの打ち合わせ、学習状況に関する担当教員へのヒアリングなどの渉外業務を行なっている。これら研修期間中の業務が主であるが、引率者は研修出発前、帰国後にもさまざまな業務を行なっている。

・短期語学研修説明会

引率者は国際交流室主催の語学研修説明会に参加し、台湾語学研修プログラムの紹介を行なっている。また同室主催の数度にわたるオリエンテーションにも参加し、渡航前の注意事項の説明を行なっている。

・事前学習会

出発前に、国際交流室の協力のもと約２～４時間の事前学習会を数回開催している。毎年、引率者の負担軽減のために、この学習会は本学の中国語専任教員の協力を仰いでいる。

周知のことだが、台湾では繁体字と呼ばれる字体（日本の「旧字体」漢字に近い字体）を用いている。これは、一般に日本の大学教育における中国語で教える簡化字（簡体字とも呼ばれる一種の略字体。中華人民共和国の漢字の正式な字体）とは異なるため、既習の文法事項であっても、漢字によっては表記方法が異なる。参加者が語学研修先で戸惑うことがないよう、国内であらかじめ繁体字を使った決まり文句・自己紹介・基本文型を教え

るとともに、映像資料を用いながら台湾に関する講義を行なう。

事前学習会では中国語に関する講義のほか、課題図書を複数冊挙げ、その読書感想文および学生自身による台湾についての調査、語学研修における抱負をレポート課題として出している。レポートは参加者全員にコピーして配布し、参加者全員に情報を共有させている。これは、研修参加者の考えや学習意欲を知ることで、互いを刺激し、自覚的に語学研修の準備を行なわせるためである。

その他、台北滞在期間中、地下鉄駅構内では飲食厳禁である点など、注意すべき生活知識をも研修参加者に共有させるようにしている。

事前学習会は、12 月上旬の参加者決定後でなければ開催できない。このため、正月や後期定期試験日程の都合上、出発までに十分な時間を確保することができない。よりよい語学研修を行なうため、参加者には出発前に台湾の歴史や文化、生活習慣等の基礎知識を学習してもらいたいのだが、時間的制約がある。より効果的な事前学習を行なうには、なお改善の余地がある[11]。

・奨学金の申請

中国語圏は欧米に比べて距離的に近いため渡航費用も安く、語学研修の費用は比較的少ない。しかし、それでも参加者には相当な経済的負担がかかる。なお、語学研修の費用（授業料・宿泊費用など）は台湾ドルで決済されるため、為替レートの変動により、円安の時期の負担はとくに大きくなる。ここ数年、超円高と円安の変動幅が大きいため、研修費用は実施年度によってかなり違うが、滞在時の食費や雑費をあわせると、参加者は平均 20 数万円を負担しなければならない。

学生の経済的負担を少しでも軽減するために、平成 25 年度まで担当教員が台北駐大阪経済文化弁事処へ奨学金申請を行なっていた。幸い平成 25 年度までは申請が認められ、台湾の教育部（日本の文部科学省に相当）から参加者全員に中国語短期語学研修補助金を１名当たり 4,300 ～ 5,301 台湾ドル（日本円にして約 12,900 ～ 16,000 円）が支給された[12]。台湾教育部へは、語学研修の成果として成果報告会の発表原稿を提出した。

・学習のサポート

台湾大学の中国語講座では、多くの宿題が課されている。年度によっては、パートナーとの交流を終え、夜になり宿舎に帰った学生は自主的に勉強会を開くこともあった。勉強会では、引率者が学生の自主性を損なわない範囲でサポートを行なった。中国語で日記をつける学生には中国語作文の添削を行なったほか、希望者に検定対策の学習指導を行なった年度もある。

・関係者との打ち合わせ

関係者との打ち合わせは、滞在期間における引率者の主要業務のひとつである。引率者は台湾大学文学院語学センターのスタッフと数回打ち合わせを行ない、引率する語学研修について意見交換を行なっている。綿密な情報交換を行なうことで、体調不良を訴える学生が出た場合に医療機関を紹介してもらうなど、迅速に対応することができる。また、授業担当教員から参加者の受講態度・学習状況を数回ヒアリングし、とくに必要がある場合は学生と個別に面談をするなどしてアドバイスを行なう。また、年度によっては台北在住の近畿大学校友会関係者と懇談会を設けた。

・トラブル

三週間という滞在期間は、複数名の参加者全員が何事もなく過ごすことができるほど短くない。どの年度でも大小さまざまな問題が発生した。

〇体調不良

一番多いのは体調不良である。台北の２月は寒暖の差が激しく、また大陸由来の PM2.5 の影響か空気があまりよくない。

参加者は、午前中は台湾大学での中国語講座に加え、午後はパートナーとの交流、夜は予習に追われ、研修期間中の１日のスケジュールはかなりタイトであり、毎日かなりの体力を消耗する。気候的要因と疲労の蓄積により、第２週目から喉風邪から体調を崩す学生が毎年複数名いる。体調を崩した学生が出た場合、台湾大学学内にある保険管理センターで受診させ、その際は引率者が通訳を行なっている。

年度によっては、食事が原因の蕁麻疹や帰国まで我慢のできない歯痛を起こした学生もいる。いずれも、台湾大学文学院語学センターの協力を得て、留学生も受診可能な病院を紹介してもらい、医師の診断を受けさせた。

〇紛失

学生が台湾大学学外で行動中、携帯電話を紛失するケースがあった。遺失物の届出を出すとともに、携帯電話会社へ所定の連絡をとった。この事例では、幸い携帯電話を拾った方から届け出があった。その他、キャッシュパスポート利用時に ATM からカードが出てこないトラブルがあった。このときは関係部署に連絡をとり、カードを即時無効化した。

〇その他

滞在中、女子学生が宿泊先の他の男性宿泊者から部屋に誘われることがあった。引率者がすぐに当該女子学生を呼び戻し、厳重注意した。

また、放課後に淡水を観光中、日本語を話していることを理不尽に咎められるトラブルがあった。これは、幸い周囲の台湾人に匿われ難を逃れることができた。後日、引率者が

学生とともにお世話になった方々へに挨拶しに行った。

・リスク管理

海外に語学研修に行くということは、ある意味、非日常の世界に身を置くことである。海外で生活する人は、身に及ぶ危険を事前に察知して回避することに努め、またいったん事態が起きたならば、いかに対処するかを常に考えていなければならない。

この点について、本学の国際交流室は、すべての語学研修参加者に「近畿大学海外リスク対応マニュアル」を配布・指導しており、また、海外において、近畿大学の学生としての自覚ある行動を求めている。さらに、参加者は全員、保険への加入が義務づけられており、海外安全危機管理「OSSMA」サービスにも加入し、出国後、一定期間経過後に所定の連絡を入れることになっている。

大学が提供する保険、危機管理のサービスに加え、引率者は参加者が自ら危機管理の意識を持ち、自覚的に行動するよう促している。研修期間中は、朝晩のミーティングで異常の有無を確認している。上述のようなトラブルが発生した際は、該当者または状況を知る者から報告させることにより参加者間で情報を共有させ、引率者はその対処法を伝える。また、ミーティングで学生が話すことをためらうような個別の案件については、引率者が参加者個人と面談し、解決法を探る。

学生との緊急連絡は携帯電話で行なうことが多い。ただし、台北は Wi-Fi 環境が整備されているうえ、スマートフォンを持つ学生がほとんどであり、引率者と宿舎外にいる学生とは SNS を用いて連絡をとることが多かった。引率者は参加者全員といつでも連絡できる手段をひとつは確保する必要がある[13]。

引率者は参加者の行動を監督するが、これは参加者自身がよりよい語学研修を行なうため自覚的に行動することを前提としている。

宿泊先での門限は、参加者に課せられるタスクの多さと健康管理の両面を考慮し設定しているが、もっと遊びたいと思う参加者は毎年少なからず存在する。旅行に来たのではなく大学主催の語学研修に来ているのだと、引率者はコミュニケーションのなかで参加者に自覚を促している。しかし、それでも引率者の注意を無視し、単独での身勝手な行動、あるいは他のメンバーに迷惑を掛ける行為を続ける者が出た場合、目下のところ、参加者に注意喚起し続けるしか術がないのが実情である。性善説では立ち行かなくなった場合の対処方法も検討する必要があろう[14]。

・単位認定

近畿大学では平成 23 年度以降、一部の学部・専攻で語学研修についての単位が認定さ

れている。これは、台湾大学語学センターでの授業成績をもとに引率者が採点する。平成27年度現在、単位の認定は以下の表3のように行なわれている。なお、表に示されていない学部に在籍する学生は、語学研修に参加できるが単位は認定されない。

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
経済学部 国際経済学科	中国語短期語学研修 1単位	中国語短期語学研修 1単位	中国語短期語学研修 1単位	海外語学研修 1単位	海外語学研修 1単位
経営学部	中国語コミュニケーション3・4 中国語カルチャーセミナーA・B のうち1単位	中国語コミュニケーション3・4 中国語カルチャーセミナーA・B のうち1単位	海外語学研修(中国語) 中国語コミュニケーション3・4 中国語カルチャーセミナーA・B のうち1単位	海外語学研修(中国語) 中国語コミュニケーション3・4 中国語カルチャーセミナーA・B のうち1単位	海外語学研修(中国語) 中国語コミュニケーション3・4 中国語カルチャーセミナーA・B のうち1単位
文芸学部	中国留学プログラムI 2単位 (文学科外国語外国文学専攻のみ)	中国留学プログラムI 2単位 (文学科外国語外国文学専攻のみ)	中国留学プログラムI 2単位 (文学科外国語外国文学専攻のみ)	中国留学プログラムI 2単位	中国留学プログラムI 2単位
総合社会学部	海外語学研修 1単位	海外語学研修 1単位	海外語学研修 1単位	海外語学研修 1単位	海外語学研修 1単位
工学部	−	−	海外語学研修 2単位	海外語学研修 2単位	海外語学研修 2単位
産業理工学部	−	留学中国語 2単位	留学中国語 2単位	留学中国語 2単位	留学中国語 2単位
短期大学部	−	−	海外語学研修 1単位	海外語学研修 1単位	海外語学研修 1単位

表3　語学研修に関する単位認定[15]

・帰国後の学習支援

語学研修の参加者の多くは、帰国後も中国語を継続履修している。しかし、本学の第二外国語カリキュラムはもちろんのこと、中国や台湾に関する専門科目や共通教養科目も決して多いとはいえない。このように、カリキュラムの面では充分な状況にはないが、本学の語学センター（無料講座）は語学研修参加者の帰国後の受け皿として機能しており、会話講座や検定対策講座を受講する学生も少なくない。また、参加者に対しては、本学における第二外国語のスピーチコンテスト「ことばのフェスティバル」への参加を促している[16]。

語学研修参加者は、おおむね語学学習に対して高いモチベーションを持っているが、学部での専門教育が本格化し、就職活動が始まると、それを維持させるのは難しい。しかし、なかには、さらなるステップアップのために、長期留学や台湾でのインターンシップ

を希望する者もいる。現在、拡充されつつある近畿大学交換留学プログラムの紹介[17]や他の長期留学の申請方法など、学生には継続学習を効果的に行なうためのアドバイスを随時行なっている。

今後の課題として

三週間の研修期間、引率者は学生を預かるという責任を負う。これには体力的にも精神的にも大きな負担がともなう。しかし、引率者は参加者が積極的に活動する姿を目にすることができ、またかれらが人間的に著しく成長してゆく姿を見てとることができるため、引率業務は充実感を得られるのものでもある。

上述したようなトラブルは毎年少なからず発生するものの、充実したプログラムに加えて、台湾大学語学センターと近畿大学国際交流室のサポートがあり、現在のところ、どの年度も大過なく語学研修プログラムを終えている[18]。

研修期間を通じて、学生は語学力を向上させることはもちろんのこと、異文化に対する理解、国際的なマナー、本学の学生間での相互理解や尊重など、多くのことを学ぶ。参加者からは一生の思い出に残る、貴重な経験だったという声が毎年多く寄せられている。

参加者の本研修に対する満足度はかなり高い。このため、この中国語圏での短期滞在という「体験」を「経験」として昇華させるために、さらに今後どのような方策が講じられるかを検討する必要がある。また、よりよい語学研修にするために、出発前、研修期間中、帰国後の三つの取り組みを有機的に結びつけるべくさらに学生に働きかける必要もある。

近畿大学では初級・初中級向けの中国語授業の受講者が5000名近くいる。多くの中国語履修者を抱えながら、語学研修参加希望者は北京大学と台湾大学を合わせても毎年10名強しかいない。これはかなり危機的な状況だろう。学生が内向きになっていることも考えられるが、教学と宣伝という、二つの面でさらなる改善の余地がある。

本学で第二外国語を履修する学生は、履修の目的のひとつとして、話すことができる「語学力」を身につけることを挙げる者が多い。中国語教育をより充実させることは教員一人一人の責務であり、単位のための語学授業から、学生が主体的に少しでも中国語学習に取り組めるように創意工夫する必要があるだろう。一例として、語学研修もカリキュラムの一環として捉えることも可能なテキスト作りや、リスニングと会話により重点を置いた授業運営が考えられる。カリキュラムの拡充は望むべくもない状況だが、担当授業に対して絶えず努力するとともに、学生が知識に裏打ちされた語学力を身につけるために、長期的な視野から、ことばに対する興味以外にもその文化や歴史に対する知識を深めさせ、異文化に対する理解力を涵養する必要がある[19]。

毎年度、語学研修の文化講座には台湾の伝統文化に関するプログラムを入れているが、実際のところ、参加者はあまり伝統文化に興味や関心を抱いていないことが多い。残念なことに、文化学習の際、なぜ台湾に来て古臭いものを学ばなければならないといけないのか！と不満をもらす参加者も少なからずいる。一面的な価値基準しかもたず、多様性に対して不寛容な学生に対して、かれらの好奇心を喚起することは難しい。しかし、「語学」を学ぶには、結局のところ「語学」以外のものにも関心をもたなければ、そのことばを習得するのは難しい。

自戒を込めて言うならば、教員は「語学」以外のことがらを学ぶことがなぜ重要かを学生にわかりやすく説明する必要がある。これは、語学教員としてだけではなく、一人の教員としての総合力が問われることになるだろう。普段の語学の授業だけではなく、共通教養科目[20]などで、学生が他者に興味をもち寛容さを養うために、我々はより多くのことばを費やして広く語りかけなければならない。また、台湾は「親日的」だという常套句だけでは捉えきれない、台湾の複雑な歴史的経緯についても指摘していく必要があるだろう。

3週間という期間は語学を学ぶには短いが、それでもさまざまなことを学ぶことのできる貴重な時間である。参加者に学生生活以外の要素にも目を向けさせるために、インターンシップや会社見学、工場見学などをプログラムに組み込むことも、視野に入れる必要があるだろう。台湾で活躍する近畿大学卒業生の人脈を生かして、インターンシップを行なうことができるか今後検討したい。

短期語学研修という語学実践の場は、本学の中国語教育に欠かすことのできない存在である。この場を近畿大学の中国語教育というひとつのパッケージのなかで有効に機能させ、学生にとって有意義かつ充実した語学研修にするのは、本学に在籍する中国語教員にとっての一つの課題である。語学研修の主役は教員ではなく、あくまで学生である。学びたい学生のためにいかなる支援ができるか、中国語教員の協力を仰ぎながら、さらに模索していきたい。

注

1　北京大学への語学研修は、平成21年度から23年度は春期語学研修として、平成25年度からは夏期語学研修として実施されている。期間はいずれも4週間であり、これまでの参加者は延べ58名にのぼる。

2　一般的な履修モデル10科目10単位は、基幹科目として1年次に総合1と総合2、2年次に総合3と総合4、発展科目として2年次にコミュニケーション1とコミュニケーション2、3年次にコミュニケーション3とコミュニケーション4、カルチャーセ

ミナー A とカルチャーセミナー B がある。なお、1、3、A は前期開講科目、2、4、B は後期開講科目であり、すべて 1 単位である。総合社会学部では平成 26 年度入学生まで、一年次に第二外国語が履修できなかった。ただし、2 年次では総合 1、総合 2 とともに、コミュニケーション 1、コミュニケーション 2 の 4 科目が開講され、前期後期ともに最大で週 2 コマまでの履修が可能であった。平成 27 年度からは総合社会学部のカリキュラムが変更され、東大阪キャンパスの他学部と同様に 1 年次から第二外国語科目が週 1 コマ履修できるようになり、本学における第二外国語の一般的な履修モデルと足並みをそろえることになった。

3　一部の学部学科では、わずかながら第二外国語を取り巻く状況に対する改善の道が模索されている。経済学部国際経済学科では、共通教養科目外国語科目としての第二外国語以外に、専門科目として中国語入門、中国語会話などの科目を開講している。また、経営学部では平成 25 年度から第二外国語 2 単位が必修となっており、理工学部情報学科でも 4 年次への進級要件として第二外国語 2 単位が必要となるなど、事実上の必修科目となっている。ちなみに、平成 28 年度から新設予定の国際学部では 2 年次後期から週 2 コマ第二外国語の履修が可能であるという。

4　近畿大学経営学部教養・基礎教育部門外国語部会 2013 年度 FD 集会「授業外活動としての外国語教育」（2013 年 6 月 29 日、近畿大学 21 号館 424 教室）Ⅰ部「海外語学研修（現状と今後の課題）」において、飯塚と中野が行なった中国語圏に関する口頭発表。本稿はこの口頭発表をもとに大幅に加筆したものである。

5　参加費用は、研修費用、渡航費（往復航空券代 + 空港使用料 + 出国税）、宿泊費の合計である。研修費用は台湾ドルで決済されるため、為替レートによって誤差が生じる。なお、平成 22 年度までは学生が台湾到着後に研修費用を支払っていたが、国際交流室が業者に出発までの手続きを委託したことにより、参加者は出発前にすべての経費を支払うことになった。

6　体調管理はもとより参加者個人がすべきものであるが、体調面のケアは引率者の重要な業務のひとつである。なお、異性では立ち入ることの難しいことがらには、リーダー・サブリーダーを中心にケアをしてもらっている。

7　台北における住宅事情は私費留学をする上で留学志望者のハードルのひとつになっている。

8　平成 19 年度のみ、台北駅の近くにある YMCA 台北国際青年旅館に宿泊した。交通や食事の面で利便性はあるものの、宿泊費が高いため学生の経済的負担が大きいと考え、平成 20 年度から台北教師会館に宿泊先を変更した。

9　リスク管理の観点から考えると、複数の目があることは防犯の観点からも一定の役割

を果たしていると思われる。なお、念のために付言すると、これは実際に何か問題が起こったということではなく、また、参加者を信頼していないということでもない。

10 語学研修終了後に長期留学（私費）する学生の住居探しのサポートを行なった年度もある。

11 一方で、引率経験者のなかには、教えすぎることは学生から台湾で見聞することに対する新鮮さを奪うことにもつながりかねないとする向きもある。

12 申請にあたっては、台北駐大阪経済文化弁事処文教課課長黄冠超氏にお世話になった。記して感謝する。なお、残念ながら平成 26 年度に同制度は廃止された。

13 平成 25 年度からは、国際交流室が参加者全員に学校指定の携帯電話の携帯を義務づけた。

14 「2015（平成 27）年度夏期語学研修募集要項」には、「引率指導教員および研修先大学がこの研修に耐えられないと判断した学生については、研修途中であっても、本人の意志を尊重したうえで、帰国させることもあります」（同 4 頁）という条文があるが、運用には慎重を期す必要があるだろう。

15 学習時間は 2 単位相当だが、共通教養科目外国語の単位として認定される学部は 1 単位、専門科目として認定される学部は 2 単位となっている。

16 「ことばのフェスティバル」に関しては、酒匂康裕、林（飯塚）君穂、河野英二、中野徹「学生交流から始める国際化（その 4）ことばを通じた教育的交流活動の報告及び今後の学習支援」（『近畿大学教養・外国語教育センター紀要　外国語編』第 4 巻第 1 号、2013）に詳しい。なお、「ことばのフェスティバル」における中国語での出場者は、平成 23・25 年度でスピーチ部門 1 位、平成 24 年度でパフォーマンス部門 1 位を獲得している。

17 近畿大学交換・派遣留学の受け入れ先としての中華圏の大学は以下のとおりである（2015 年 4 月 27 日現在）。国立台湾大学、開南大学、亜洲大学、逢甲大学、国立中央大学、淡江大学、香港浸会大学、香港樹仁大学。ただし、開南大学と香港浸会大学、香港樹仁大学は英語での申請となる。

18 これまで順調にプログラムを実施できたのは、台湾大学と近畿大学関係部署の支援によるところが大きい。とくに、台湾大学文学院語学センターのスタッフ蔡宜倩氏には毎回、献身的なサポートをしていただいている。また、同スタッフの孫文韻氏にも大変お世話になった。近畿大学国際交流室の三嶋真理氏、松川恵子氏、山本純子氏には研修前、研修中、研修後の長期間にわたり近畿大学側の窓口として、惜しみない支援を受けた。記して感謝したい。

19 学生本人が台湾大学への語学研修参加を希望しても、昨今の中国関連の報道の影響を

受けて保護者が反対するケースも見られる。講義科目で、中華人民共和国や台湾の歴史、政治体制の違いなど、基本的な知識についても授業を通じて学生に教える必要もある。

20　現在、近畿大学の共通教養科目として、第二外国語の語学教員が担当している科目には「ことばと文化」や「国際化と異文化理解」がある。